



Title	重複形オノマトペの韻律構造
Author(s)	那須, 昭夫
Citation	大阪外国語大学論集. 2001, 25, p. 115-125
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79862
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

重複形オノマトペの韻律構造

那須昭夫

Prosodic Structure of Reduplicated Mimetics in Japanese

NASU Akio

Previous studies of Japanese reduplicated mimetics have identified many morphological variations among them. For instance, Amanuma (1974) classifies them into 15 patterns. This paper, on the other hand, proposes that those seemingly numerous variations can be classified into (as few as) two major groups in terms of their prosodic structure. The most typical form like "pika-pika" belongs to head-initial group (type-A) and has three striking properties: (1) Accent is always assigned on the left-most syllable of the word, (2) The number of reduplicant is strictly fixed, and (3) The left-most foot is identified as a prosodic head. In addition, type-A mimetics are generated with a specific prosodic structure, called Bipodic Template (Poser 1990). The other group (type-B) consists of head-final mimetics such as "pika-pikaQ". Mimetics in this group show behavior completely opposite to that of type-A mimetics with respect to the properties (1)-(3) listed above. This article attempts to show phonological and morphological differences between two types of reduplicated mimetics, focusing on their accent, foot structure, and word formation process.

1. 序

特定の構造を繰り返すことによって新たな語を派生する形態論的操作は重複語形成 (reduplication) と呼ばれ、日本語にあってはオノマトペ⁽¹⁾を中心に見られる。たとえば「ピカピカ」「ポンポン」など「ABAB 型」の構造を持つ形が最も典型的であるが、それ以外にも重複形オノマトペには様々な形態上のバリエーションが観察され、天沼 (1974) では実に15種類もの形態分類が試みられている。(1)に示すのは、そうしたバリエーションの一部である。

(1) 重複形

- a. ピカピカ, ポンポン, スイスイ, ザーザー

- b. パッパ, キャッキャ, サッサ, カッカ
- c. ピッピッピッ, ポンポンポン
- d. ピピピッ, ポポボポン
- e. ピカピカピカッ, ガタガタガタン

もちろん、重複形のバリエーションはこれだけに留まらない。「ピッカピカ」「ドッカンドッカン」など強調辞を含んだ形態まで「重複形」の範疇に入れるならば、バリエーションの幅はさらに広がって行く。しかしながら、形態の表面に現われる違いを逐一挙げて細微な分類を施すことだけが有意義な分析につながるわけではない。むしろ、バリエーションの中からより一般的な共通点を探し出すことにより、一見異なる形式を持つ形態どうしの間に同一の特徴が共有されている様子を明らかにすることができる。

本稿では、アクセント・フット・音節構造などの韻律的側面に焦点を当て、重複形オノマトペの類型が大きく二種類に分けられることを明らかにする。ひとつは、音韻的主要部を構造の左端に含む主要部始端型の類型（タイプ A）であり、もうひとつは主要部を構造の右端に含む主要部末端型の類型（タイプ B）である。両者は音韻的に全く正反対の特徴を示すばかりか、形態構造においても対極的な性質を示す。本稿では、両者の対極性についてまず論じた後、主要部始端型のオノマトペに含まれる特異な韻律構造（二脚架錠型）の性質について考察する。

2. 構造の対極性

たとえば物体が鋭く光る様子を表すオノマトペ表現について考えてみると、①「ピカピカ光る。」という表現が可能であるのと同時に、②「ピカピカッと光る。」という表現も可能であることに気づく。両者はともに「ピカピカ」という同一の構造を共有しているため、一見したところかなり類縁性の高い形態どうしであるかのように思われる。同様な形態の対は「ピカピカ」のみならず重複形オノマトペの随所に観察される。

(2) a. ①: タイプ A	b. ②: タイプ B
ピカピカ (光る)	ピカピカッと (光る)
コロコロ (転がる)	コロコロッと (転がる)
ガタガタ (崩れる)	ガタガタッと (崩れる)
バタバタ (倒れる)	バタバタッと (倒れる)
ヒラヒラ (舞う)	ヒラヒラッと (舞う)

この対を見た限りでは、(2b) は (2a) の形態の末尾に促音が加わることによって生成される形であるようにも思われる (XYXY+ッ)。しかしながら、両者の形態論的・音韻論的性格は類縁的であるところか、全く対極的なのである。以下、(2a) と (2b) のそれぞれのタイプを

便宜的に「タイプA」「タイプB」と略称し、両者の対極性について見て行く。

2.1 形態構造

まず形態論的な側面に関しては、繰り返しの作用の起こる回数に大きな違いが観察される。タイプAでは複数回の重複が生じた「*ピカピカピカ光る、*コロコロコロ転がる、…」といった形態が適格でない。だが、タイプBでは「ピカピカピカッと光る」「ピカピカピカピカピカッと光る」といった具合に、重複の回数を任意に増やすことができる。この違いは、重複子 (reduplicant : RED) の生成回数の違いとして次のようにまとめられる。

(3) 重複子の生成回数

- a. タイプA : $RED=1$
- b. タイプB : $RED \geq 1$

タイプAでは重複子の生成回数に厳密な制限が課せられているが、一方でタイプBの場合は重複子の生成回数に制限が存在せず、論理的に無限の重複子を生成できる。

この事実は、タイプAとタイプBが明らかに異なる語形成の過程を含むことを物語っているが、従来のオノマトペ研究では、両者がある意味で同一視されてきたきらいがある。たとえば天沼 (1974) はタイプBの「ピカピカッ」がタイプAの「ピカピカ」に対して促音を添付することによって作られる形だとしている。

(4) ピカピカ (A) + 促音 → ピカピカッ (B)

しかしながら、この分析は明かな誤りを含んでいる。仮に(4)のプロセスが実在するのであれば、二回以上の重複構造を持つ「ピカピカピカッ」のようなタイプBの重複形が派生される場合、そのベースとして本来起こらないはずの「*ピカピカピカ」といったタイプAの重複形を想定しなければならなくなるからである。上に述べたように、タイプAでは二回以上の重複構造が許されないことから、(4)の分析ではどうしても非文法な形（「*ピカピカピカ」など）をベースとして位置付けざるを得ないという問題が起こる。

これに対し、村田 (1993) はタイプBが接辞形オノマトペをベースに派生される形態であると述べているが、こちらの観察は至極妥当であろう。すなわち、「ピカピカッ」は「ピカピカナッ」と表される過程を含んでいるのではなく、接辞形「ピカナッ」に対して重複子「ピカ」が前接した重層的な構造を含むと考えられる。他方、タイプAは単に語幹「ピカ」を繰り返しただけの構造であり、重層的な派生構造を含まない。

(5) 語形成

- a. タイプA : [Stem+RED]
- b. タイプB : [RED+ [Stem+Suffix]]

2.2 アクセント

音韻論的側面に関しても、タイプ A とタイプ B は明らかな相違を見せる。前者ではアクセントが語頭型を示す一方で、後者では語末までピッチの高い型を示す⁽²⁾。

(6) アクセント

a. 語頭型 (タイプ A)

ビカピカ
コロコロ
ガタガタ
バタバタ
ヒラヒラ

b. 語末型 (タイプ B)

ビカピカット
コロコロット
ガタガタット
バタバタット
ヒラヒラット

対極的なアクセント型が現れるということは、両者におけるアクセント生成のアルゴリズムが異なっていることの証左でもある。Hamano (1998) はオノマトペのアクセントが二項フット (bimoraic foot) をベースに生成されることを明らかにしているが、その際、次の二つの原理が関与していると述べている。

- (7) a. 構造中の左端のフットに核を与える。
b. 重音節を含むフットに優先的に核を与える。

この原理に従ってタイプ A / タイプ B のアクセントの生成過程を示したのが (8) である。オノマトペのアクセント計算では構造の右端からフットが切り出された後、(7) の原理に適合するフットに核が与えられる⁽³⁾。

(8) アクセント計算 ([] はフット)

a. タイプ A : 語頭型 (ビ¹ カピ¹カ)

pikapika → [pika] [pika] → [pi¹ ka] [pika] : [L¹ L] [LL]

b. タイプ B : 語末型 (ビカピカット)

pikapikaQ → pi [kapi] [kaQ] → pi [kapi] [ka¹ Q] : [LL] [H]¹

まず、タイプ A のアクセントの計算過程では (7a) の原理が専らに働いており、二つのフットのうち左側のものにアクセントが与えられる。他方、タイプ B のアクセントの生成は (7b) の原理によるところが大きい。タイプ B でも構造中に複数のフットが形成されるが、そのうち右端のフット [H] にアクセントが与えられている。これは、当該のフットが重音節を含んでいるからにほかならない。端的に述べると、タイプ B では重音節が核を引きついていると言えるが、このような特性はタイプ A には観察されない⁽⁴⁾。

2.3 韻律構造

上述のアクセントの事実に基づくと、タイプA／タイプBのそれぞれの韻律構造を次のように一般化することができる。

(9) 韵律構造

- a. タイプA (語頭型) b. タイプB (語末型)



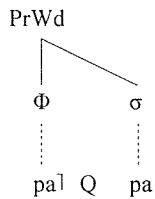
図中の「Φ」は、音韻的主要部を形成するフットを表す。(8)に示したように、重複形オノマトペには複数のフットが含まれるが、そのうちアクセント核を担うフットを主要部と考えると(9)の韻律構造が得られる ([+Acc] = アクセント核)。タイプAでは、アクセント核が常に左側のフットに与えられることから、その韻律構造は主要部始端型の構造であると考えられる (#Φ...)。一方、タイプBでは重複子の数がいくら増加してもアクセント核は常に語末のフットに与えられることから、主要部を右端に含む主要部末端型の韻律構造 (...Φ#) をなしていると考えられる。

(9)に見るように両者の韻律構造は全く鏡像的な関係にある。この鏡像的な構造に基づき、本論冒頭(1)に挙げた重複形オノマトペの諸形態がそれぞれどちらのタイプの類型に属するか検証してみよう。ただし、既に検証済みの形態(1a) (1e)については割愛する。

- (10) a. バッバ, キヤッキヤ, サッサ, カッカ (=1b)
 b. ピッピッピッと, ポンポンボンと (=1c)
 c. ピ¹ビ²ビ³ッと, ボ¹ボ²ボ³ンと (=1d)

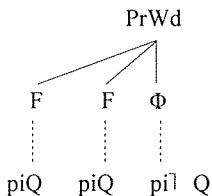
(10a)は、一音節語幹「バッ、キヤッ、サッ、カッ」をベースに派生される重複形で、そのアクセントは語頭型のパターンを示す。このためタイプAに典型的な主要部始端型の韻律構造(9a)を持つと考えられる。ただし、主要部フットの右側にそれ以上フットが形成されず、軽音節が韻律語に直接支配される緩和階層構造(Prince 1990, Itô 1990, McCarthy and Prince 1991, Itô and Mester 1992)を持つ点だけが多少異なる。

(11) 「パ」 ッパ」

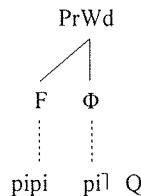


翻って (10b) および (10c) は語末型のアクセント構造を持つことから、その韻律構造は主要部末端型の類型（タイプ B）に該当すると考えられる。(10b) と (10c) は完全重複形と部分重複形の対であり、その韻律構造は微妙に異なるが、主要部フット（Φ）が韻律語の右端に位置する点では共通の性質を持つ。

(12) a. 「ピッピッピッピ」 ッ」



b. 「ピピピ」 ッ」



韻律構造が主要部末端型の類型に収まることから、これらのオノマトペでは重複子の生成回数に制限が存在しないことが予測されるが、その予測通り、「ピッピッピッピッピッピ」 「ピピピピピピ」 等、任意の回数だけ重複子を増やした形態がいずれも適格である。

2.4 まとめ

以上見てきたように、重複形オノマトペには大きく二種類のタイプがあることが分かる。形態・アクセント・韻律構造の三点を基準に、重複形オノマトペの類型をひとまずまとめておこう。

(13) 類型

	アクセント	韻律構造	語形成	重複回数
タイプA	語頭型	主要部始端型 ($\#Φ\dots$)	Base+RED	1
タイプB	語末型	主要部末端型 ($\dotsΦ\#$)	RED+Basc	無制限

タイプA: ピ¹ カピカ
ボ¹ ンボン

タイプB: ピカピカピカ¹ ッ (と)
ピッピッピ¹ ッ (と)

ス ¹ イスイ	ポンポンボ ¹ ン (と)
ザ ¹ 一ザ一	ピピピ ¹ ッ (と)
サ ¹ ッサ	ポポボ ¹ ン (と)

この表に見るように、タイプAとタイプBは全く対極的な性質を持っているわけだが、さらに興味深いのは、この対極性が音韻構造と形態構造のどちらにも現われていること、すなわち音韻構造と形態構造の間にある種の対応関係が成り立っていることである。

3. 二脚架錠型

(13) に示した項目のうち最も興味深い振る舞いを示しているのは、重複回数に関する対極性であろう。タイプAで重複子の生成回数が厳密に制限されている一方で、タイプBではそれが無制限であるというのは、両タイプの「違い」というレベルを超えてはや「断絶」に近いありようを示している。

問題は、形態構造に観察されるこの対極性が音韻構造と無関係に生じているとは考えられないことである。Poser (1990)・Itô (1990)・Hamano (1998) らが指摘するように、オノマトペの語幹に相当する形態素は韻律的には二項フット構造をなす単位に相当することが知られている。

(14) $\text{Stem} = F \ [\mu \ \mu] \ (= \text{RED})$

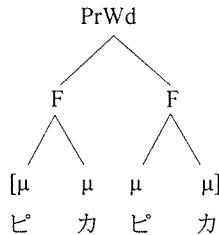
したがって、語幹 (Stem) が複写されて重複子 (RED) が生成されるという重複語形成の振る舞いは、韻律的に見るとフットの複写のプロセスとして捉えられることになる。このため、タイプA重複語で重複子の数に制限が起こるということは、語形成に伴って生成されるフットの数に制限が与えられていることと等しい。他方、タイプB重複語において重複子の生成回数に制限が存在しないということは、フットの生成に何ら制限が伴わないことを意味する。そこで、本節ではタイプA重複語の韻律構造をさらに詳しく探る作業を通じて、重複子の生成回数に相違が生じる理由について考察してみたい。

3. 1 BT 構造

重複子の生成回数が限定されているということは、タイプA重複語の韻律構造に厳密な定型性が要求されていることを物語っている。平たく述べると、「ビ¹ カビカ」「ボ¹ ンポン」などの形態はもはや決まりきった形として語彙化されており、それ以上の形態的バリエーションを加えることが許されていないのである。これらの定型的な重複形には、二つの二項フットからなる均整のとれた韻律構造がおしなべて観察される。この特異な構造は「二脚架錠型 (bipodic template : BT)」と呼ばれる (Poser 1990)。「ビ¹ カビカ」を例にその韻律構造を下図

に示す。

(15) BT 構造

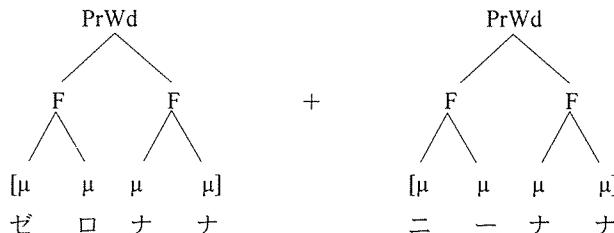


タイプ A 重複語は、「F + F」で表される一定の韻律構造に即して生成される。(11) に示した「パッパ」の類では部分的に「F + σ」構造が現われるが、これは語幹が促音を含んでいることと何らかの関わりがあるものと推察される。いずれにせよ重要なのは、上に図示した BT 構造がそれ以上拡張不可能な性格を持っているということである。換言すると、BT 構造は完全に固化した鋳型のような性質を含んでおり、その内部に新たな韻律範疇を編入して「*F + F + F…」といった拡張形式を作り出すことができないのである。BT にこうした頑固な韻律特性が備わっていることについて、以下に述べる現象を通じて確かめておこう。

3.2 拡張不能性

実は、BT 構造はオノマトペのみならず日本語全般にしばしば現われる韻律構造である。電話番号を読み上げる際のプロソディなどはその好例であろう。たとえば、偶数個の構成素からなる「0 7 2 7」では、「2」において短音節長音化が起きて二つの BT が形成される。

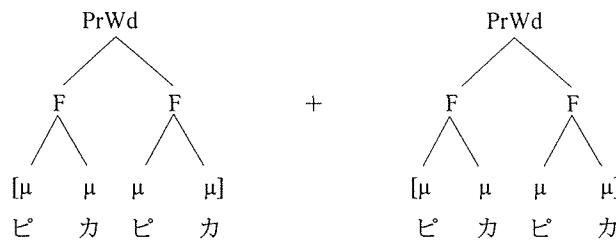
(16) 0 7 2 7



その際、アクセントが「ゼロナ】ナ・ニーナ】ナ」といった具合に BT 単位に与えられている点に留意したい。決して「*ゼロナナニ】一ナナ」のような複合化したアクセントは現われないのである。このことは、BT が単独の韻律語をなす単位であることを意味すると同時に、「ゼロナナニーナナ」のような多モーラ構造が同一の韻律語に組織化されず、二項フットを単位とする BT 鋳型によって分割されていることを明確に物語っている。

興味深いのは、これと全く同様な性質がタイプA重複語にも観察されることである。タイプA重複語では、場合により「ピカピカピカピカ光る。」のように一見したところ複数回の重複が起きているかのような形態が用いられることがあるが、その場合、アクセントの山は必ず「ピカピカ・ピカピカ光る。」のようにBT単位で分割されてしまう。

(17) ピカピカピカピカ (光る)。



数字の連鎖「0 7 2 7」と同じく、この場合も「*ピカピカピカピカ」のようなアクセントの再計算（＝複合化）が起こらない。

BTが拡張を許さない固化した領域であることは、「0 9 0」のような奇数個の構成素からなる番号を読み上げる際のプロソディにもよく現われている。(18)に示すように、「0 9 0」では「0 9」の部分がひとまとまりのアクセントの山を構成し、右端の「0」だけは別の山を構成する。

(18) 0 9 0

ゼロキュー・ゼロ

この場合も、BTからあぶれるの右端「0」を組み入れて「*ゼロキュー・ゼロ」のような複合化したアクセントを構成することはできない。この振る舞いを一般的な形で表示すると次のようになる。

(19) BT 解析

$$F + F + F \rightarrow [F + F]_{\text{PrWd}} + F$$

BTに閑知的な語形成および韻律現象では、所与のフット連鎖「F+F+F」を韻律語に組織する場合にその全てが同一の韻律語に解析されるのではなく (* [F+F+F]_{\text{PrWd}}), BTによる切り取りが構造の左端から起こり、BTに適合する単位だけが一つの韻律語に組織される（「BT解析」）。言うまでもなく、これはBTが四モーラ以上のサイズに拡張することのできない定型化した韻律領域であるからにほかならない。

3.3 BT 依存型と非依存型

BT が拡張不能な固化した韻律構造であること、および、タイプ A 重複語が BT に閑知的な語形成であることを踏まえると、タイプ A において重複子の無限生成が許されない理由はもはや明らかであろう。タイプ A 重複語では BT が規定するサイズ、すなわち二フット四モーラの大きさを越える語形成が許されないため（BT 依存型語形成）、このサイズの範囲内で重複子を生成するには、最大にして一つのフットに相当する分しか空席が残されていないことになる。（14）に見たように、オノマトペの重複子はフットに相当する構造を持つので、一つのフットに相当する空席とはすなわち、重複子一つ分の空席であることを意味する。

他方、タイプ B 重複語において重複子の無限生成が許されているのは、この語形成が BT 構造に無閑知な性格を持つからだと考えられる（BT 非依存型語形成）。このため、タイプ B の場合、音韻的主要部が領域の終端にありさえすればその左側にどれだけフットを生成しても構わない。

4. 結語

本稿では、日本語オノマトペの重複構造に①主要部始端型（タイプ A）と②主要部末端型（タイプ B）の二つの対極的な類型が存在することを論じ、両者の音韻構造ならびに形態構造が鏡像的な性格を持つことを明らかにした。また、重複子の生成回数に見られる極端な隔たりが生じる理由について、それが二脚架鋸型（BT）と呼ばれる特異な韻律構造に起因する現象であることを論じた。

むろん、オノマトペの重複語には本稿で論じたもの以外にもさまざまなタイプが存在する。その全ての韻律構造を統一的に把握するには、本稿で示した分析はやや範囲の狭い一般化に過ぎないかもしれないが、少なくとも重複形オノマトペの基層的なバリエーションに関しては本稿で述べた二つの類型のいずれかにあてはまると考えられる。これに当てはまらない形態、たとえば「ピカリ+ピカリ」のように派生語どうしが結合したタイプのものについても機会を見て追加の議論を試みる必要があるが、それは今後の課題としたい。

注

1. 擬声語（ないしは擬音語）と擬態語（ないしは擬容語：小林1935）は本来性質の異なる語彙であるが、本稿では用語上の便宜のため両者をまとめて「オノマトペ」と総称する。
2. タイプ B 重複語のアクセントは助詞「と」を伴わずに発音すると平板型との区別が起こらないが、「と」をつけて発音するとそれが尾高型であることがはっきりするだろう。「と」の直前でピッチが下がるからである。ただ、核の位置がどこであるかは実のところ判然としない。本稿では促音の直前のモーラに核があると解釈したが、個人によっては促音の直後でピッチの下がり目が起こるとの判断もあり得よう。一般語種では特殊モーラが核を担うことはあり得ないので、これに敷衍すると促音直前のモーラに核の所在を求めたほうが合理的であるが、オノマトペが一般語種と同じ音韻的性質を持つとは必ずしも断定できない点に留意する必要もある。ちなみに、促音ではなく撥音を

伴う「ガタガタンと」などでは、撥音まで高く続ける型も適格だと思われ、Hamano (1998) および Oda (2000) ではこの型に基づく記述が見られる。

3. フット解析が右端から起こるとの想定は、Poser (1990) のフット理論に基づくものである。
4. 「ボンポン」のように二つの重音節からなるタイプ A 重複語では必然的に重音節に核が付与されるが、これは「ポンポン」の音節構造に起因するものであり、(7b) の特性によるものとは言えない。むしろ「ボンポン」では左側のフットに核が付与されていることから、(7a) の原理こそがアクティブに作用していると言える。

参考文献

- 天沼 寧. 1974. 「擬音語・擬態語について」『擬音語・擬態語辞典』東京：東京堂出版. , pp. 3-62.
- Hamano, Shoko. 1998. *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford, CA:CSLI Publication. & Tokyo: Kurosoio.
- Itô, Junko. 1990. Prosodic Minimality in Japanese. *CLS* 26-2, pp. 213-239.
- Itô, Junko and Armin Mester. 1992. Weak Layering and Word Binarity. *LRC*-92-09, Linguistic Research Center, UCSC.
- 小林英夫. 1935. 「国語象徴音の研究」『言語学方法論考』東京：三省堂. , pp. 96-143.
- McCarthy, John and Alan Prince. 1991. Lectures on Prosodic Morphology. LSA Summer Institute, UCSC.
- 村田忠男. 1993. 「日英語の AB 型オノマトペ・重複形・等位構造表現の関係」覧壽雄・田守育啓 (編)『オノマトピア－擬音・擬態語の楽園－』東京：勁草書房. , pp. 101-125.
- Oda, Hiromi. 2000. An Embodied Semantic Mechanism for Mimetic Words in Japanese. Ph.D. diss., Indiana University.
- Poser, William. 1990. Evidence for Foot Structure in Japanese. *Language* 66, pp. 78-105.
- Prince, Alan. 1990. Quantitative Consequences of Rhythmic Organization. *CLS* 26-2, pp. 355-398.

(2001.5.22受理)